

20年夏、輸入野菜に起きた 異様な動きを検証

毎年8月は夏秋野菜シーズン真っ盛り。東北・北海道の夏秋野菜に加え、春からの関東産地の残量もあり、多くの場合、潤沢な出回りとなる。学校給食もない夏休み期間中ということもあって、業務用需要も引きは弱く、価格もこなれて末端消費も順調に活性化。国内産が豊富で安値なら、自給率は高ま

り輸入も減るはずだ。しかし20年は、直接的には、7月の長梅雨などで記録的な曇天続き、8月には一転してこれまた記録的な猛暑日が続いて、関東以北の夏秋野菜産地は大きなダメージを受け、価格は暴騰した。もちろんコロナの影響も大きい。こうした国内事情が輸入野菜に異様な動きをもたらした。

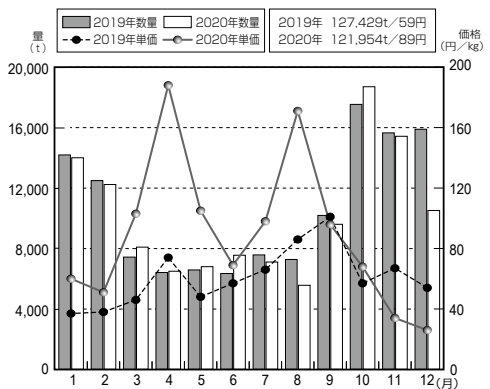
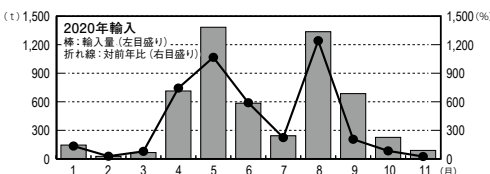
ハクサイ

8月に輸入前年比12倍に、外出自粛で「夏鍋」需要出現

【概況】 20年8月のハクサイの輸入量は前年の12倍、1300tを超えた。不要期の真夏にはめつたに見られない現象だ。実際、東京市場の8月の入荷量は前年より23%減って単価は2倍になっている。ただしハクサイの輸入量が増えているのは8月だけでなく、4月7倍、5月11倍、6月6倍、7月と9月が2倍である。東京市場の4、5月の入荷量は前年並みながら、それぞれ単価は2.5倍、2.2倍になっている。国産の入荷減・高騰に輸入が素早く対応した。

【今後の対応】 輸入先は中国である。中国が、日本からの注文に迅速にこたえられるのは、韓国向けのキムチ用に、また日本の漬物メーカーからの契約生産もあるために、日本種のハクサイが周年生産されているからだ。すでに韓国は、キムチ需要の6割以上を中国からの輸入に頼っている（韓国メーカーによる中国工場生産含む）。今年はコロナという特殊要因から需要構造が変わった。想定外の緊急態に備えるためにも、中国産でリスクヘッジする用意が必要になる。

【背景】 8月の入荷減と高騰は、夏の主産地・長野県の下口ヶなど猛暑による高温障害の影響だ。通常は95%以上のシェアを持つ長野産が8月は3割も入荷を減らした。では、5月の輸入急増の理由は何か。東京市場で圧倒的主産地・茨城の入荷量は減っていないが単価は2.2倍になった。理由は明白で「需要増」である。業務用需要に引きが弱い月であるが、自宅に家族が揃って1日3回食べるのだ。季節に違和

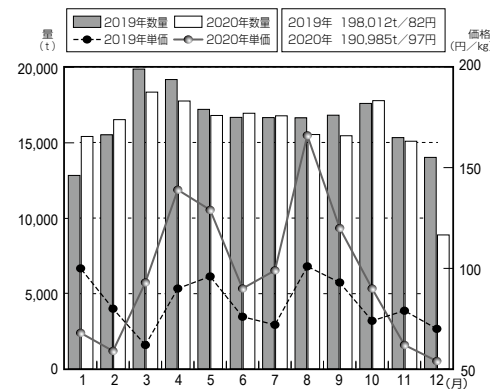
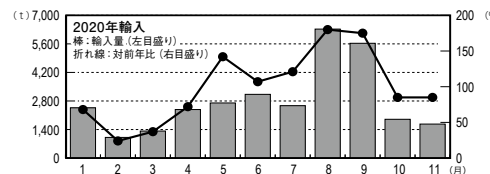


キャベツ

群馬・長野産の猛暑で輸入増、反収8t目指して加工用産地を

【概況】 キャベツの輸入は20年1〜4月に前年をかなり下回っていたが、5月から前年を4割上回ったのを皮切りに、8、9月には75〜80%も増えた。東京市場の入荷状況に照らすと、年明け1〜3月では愛知産が前進気味で多かったが、4、5月には愛知産の切りあがり時期が早まって徐々に入荷減となった。8月ごろには、東北・北海道が増やしてきたものの、主産地群馬10%程度、長野は26%も入荷減となり、単価は5〜6割高くなり、輸入増につながった。

【今後の対応】 カット業者などは、輸入物のランニングストックを持ちながら、主に市場から当用買入するのが一般的。国産の豊凶に合わせて輸入品で調整しているため、輸入数量は結構増減が激しい。こうした輸入需要を代替・獲得するため、近年ではJAを中心として「加工業務用」に特化した契約取引、機械化を目指し、省力や省コスト、大玉品種・増収技術導入などのケースが増えている。反当たり4000株前後で1玉2〜2.5kg、1玉50円でも反収8t、20万円になる。



今年の市場相場を読む

ニンジン

7月に2・5倍高騰・輸入6割増、国民食カレーに強力な需要

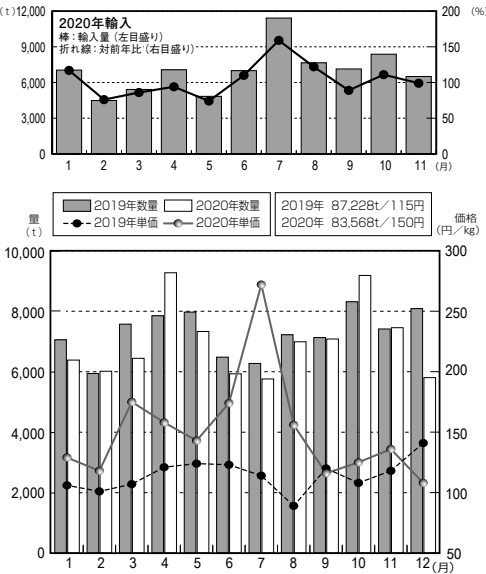
【概況】ニンジンの輸入は、年初めに17%増もあったが、4月までは前年を下回った。6月から増加に転じ7月には59%、8月には22%増えた。東京市場の入荷状況を

見てみると、20年に入っても入荷減傾向は継続しており単価も高値推移してきた。3月は64%、4月に31%いずれも高く、輸入が増え始めた6、7月には、8〜9%程度の入荷減でも単価は7月で2・4倍にもなる。10月の時点ですでに輸入数量は7万tに達し、東京市場の単価は年間換算で3割高だ。

【背景】7月に輸入が前年より6割増えたのも、東京市場では不作だった干葉産の入荷が前年の半分しかなく、キコ単価が272円と高騰。輸入量はこの月は1万tを超えたが、東京市場に入荷したのは、300t程度。それでも例年よりかなり多いのは、8%程度の入荷減で相場が敏感に反応したからだ。いつもはこの時期にはない九州産も緊急に入荷していた。業務用が元気のない時期だったが、代わって小売店

家庭需要、小売用のカット野菜類が堅調だったからだ。

【今後の対応】イモ・タマ・ニンジンは、日本の「国民食」であるカレーの主役たちだ。この3品目のうちいちばん不安定なのがニンジンだ。それでもお母さんたちがニンジンを買うのは、定番だからという以前に、ピーマンと並んで、子供に食べさせた緑黄色野菜の代表格だからである。干葉産の春ニンジンは10月以降の例年並みの天候推移で生育も順調である。厳冬の予想もあるが、この冬の需給関係も安定するはずで、20年の輸入量は8万t強に収まるか。



レタス類

珍しく夏に輸入増、高冷産地にも温暖化対応が喫緊

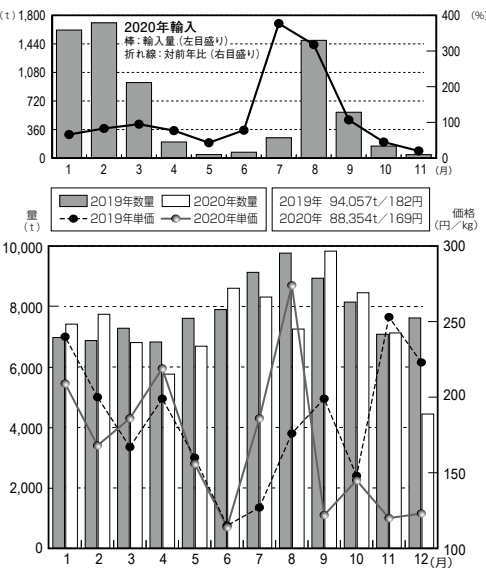
【概況】レタス類の輸入は、年明けの1、2月には恒例となった台湾産の春レタスが3000tを超えて入ってきた。しかし、通常ではありえない夏場に輸入が増えた。7月3・7倍、8月3・2倍

だ。東京市場の入荷状況を参照すると、7月には1割減って46%高だったが、8月に至っては26%減の56%高という逼迫状態になった。夏には毎年米国からの輸入があり、東京市場にも入荷している。しかし昨夏は、主産地の長野・群馬の高冷地レタスが猛暑の影響を受けた。

【背景】7月、8月の高冷地レタスがダメージを受けた場合、どんな産地が出荷を増やせるのだろうか。緯度が高い産地としては岩手や北海道がある。岩手は日照不足や猛暑の影響を受けたが、北海道は積極的に出してきた。平場の埼玉や静岡が出てくるのは洋菜に強い産地で潜在的な生産力があるからだ。それでも、85%程度のシェアがあるこの時期の長野の代替は難しい。業務用は自粛期間だといえ、カット野菜

などの加工需要はかえって強まったのが輸入増の背景だ。

【今後の対応】レタスは今の日本では、家庭用としても加工・業務用としても、必需野菜。主な需要期といわれるのが夏場ではあるが、周年需要が形成されている。緊急時には米国などの供給力で補完できるが、冬春レタスについては、国内産地が安定感を欠いており、業務用需要者向け産地が台湾に形成されている。このケースは地元行政も支援して、責任をもって、供給責任を負っている。気候変動で、高冷地の産地が力を失うというシミュレーションをしておく必要がある。



※各グラフとも2020年12月の数値は中旬までを集計、年累計も12月下旬は含まない

流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。